

平安宮正親司跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 二〇〇六―一二

平安宮正親司跡

2006 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安宮正親司跡

2006年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生き続けています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来 1200 年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じて広く公開することで市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成 13 年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ大規模調査までありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび新学寮新築工事に伴う平安宮跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

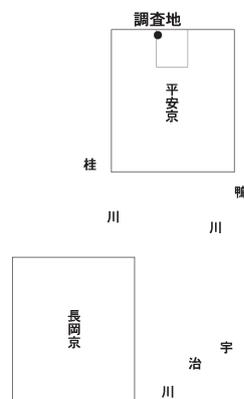
末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げる次第です。

平成 18 年 10 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 川 上 貢

例 言

- | | |
|----------|--|
| 1 遺 跡 名 | 平安宮正親司跡 |
| 2 調査所在地 | 京都市上京区下長者町通七本松西入鳳瑞町 223 |
| 3 委 託 者 | 本門佛立宗 宗務本庁 宗務総長 山内日開 |
| 4 調査期間 | 2006年8月9日～2006年9月15日 |
| 5 調査面積 | 280 m ² |
| 6 調査担当者 | 平田 泰 |
| 7 使用地図 | 京都市発行の都市計画基本図(縮尺1:2,500)「衣笠山」「船岡山」「花園」「聚楽廻」を参考にし、作成した。 |
| 8 使用測地系 | 世界測地系 平面直角座標系VI(ただし、単位(m)を省略した) |
| 9 使用標高 | T.P.:東京湾平均海面高度 |
| 10 使用基準点 | 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点(一級基準点)を使用した。 |
| 11 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。 |
| 12 遺構番号 | 遺構毎に番号を付し、遺構の種類を前に付けた。 |
| 13 遺物番号 | 通し番号を付し、写真番号も同一した。 |
| 14 掲載写真 | 村井伸也 幸明綾子 |
| 15 遺物復元 | 村上 勉・出水みゆき |
| 16 基準点測量 | 宮原健吾 |
| 17 本書作成 | 平田 泰 |
| 18 編集・調整 | 児玉光世 |



(調査地点図)

0 2 4km

目 次

1. 調査経過	1
(1) 調査の経緯	1
(2) 位置と環境	2
(3) 周辺の調査	3
2. 遺 構	7
(1) 遺構の概要	7
(2) 検出遺構	7
3. 遺 物	11
(1) 遺物の概要	11
(2) 出土遺物	11
4. ま と め	19

図 版 目 次

図版1	遺構	1	平安時代全景（北西から）
		2	江戸時代以降全景（北西から）
図版2	遺構	1	溝2（北から）
		2	建物1（北西から）
		3	溝1・土壇1（南西から）
図版3	遺物		出土遺物

挿 図 目 次

図1	調査区位置図（1：2,500）	1
図2	調査区配置図（1：800）	2
図3	調査前全景（南西から）	3

図4	作業風景	3
図5	周辺の調査位置図（1：5,000）	4
図6	正親司跡位置図（1：1,000）	6
図7	調査区断面柱状図（1：50）	7
図8	調査区遺構平面図（1：200）	8
図9	土壙1・溝1実測図（1：100）	9
図10	土壙3実測図（1：100）	9
図11	柵1実測図（1：100）	10
図12	建物1実測図（1：100）	10
図13	土壙1出土遺物実測図（1：4）	11
図14	溝1出土遺物実測図（1：4）	12
図15	溝1出土緑釉不明製品	12
図16	土壙2出土遺物実測図（1：4）	13
図17	土壙3出土遺物実測図1（1：4）	14
図18	土壙3出土遺物実測図2（1：4）	15
図19	土壙3出土遺物実測図3（1：4）	16
図20	土壙3出土墨書土器	17
図21	土壙3出土遺物実測図4（1：4）	17
図22	土壙3出土遺物実測図5（1：4）	18
図23	柱穴1出土遺物実測図（1：4）	18

表 目 次

表1	遺構概要表	10
表2	遺物概要表	18

付 表 目 次

附表1	掲載遺物一覧表	20
-----	---------	----

平安宮正親司跡

1. 調査経過

(1) 調査の経緯

京都市上京区下長者町七本松西入鳳瑞町 223 の本門佛立宗の敷地で、佛立教育専門学校新学寮新築工事の計画が明らかになった。対象地は平安宮正親司の中心地区に比定されるため、京都市文化市民局文化財保護課が 2006 年 7 月 2 日に試掘調査を実施し、平安時代前期の遺物が出土する遺構が確認された。

平安宮の重要な遺構の検出であることを原因者に説明、理解を得た上で発掘調査の実施を指導し、原因者から財団法人京都市埋蔵文化財研究所に調査が委託される運びとなった。調査面積は約 280 m²で、調査期間は 2006 年 8 月 9 日から 9 月 15 日までの予定であった。

調査は、8 月 10・11 日に盛土層を重機によって除去、8 月 14 日から本格的な調査を開始した。8 月 21 日までに近代以降の攪乱層と江戸時代の遺構を調査し、8 月 22 日に全景写真を撮影した。以後、中世の堆積層を除去して、平安時代の遺構を検出した。この結果、平安時代前期の土壌・溝・柵・建物を検出し、同じく前期の土器類・瓦類が出土した。9 月 5 日に最終の全景写真を撮影、図面類の作成を行い、現地説明会に向けた準備を行った。9 月 9 日には現地説明会を開催し、調

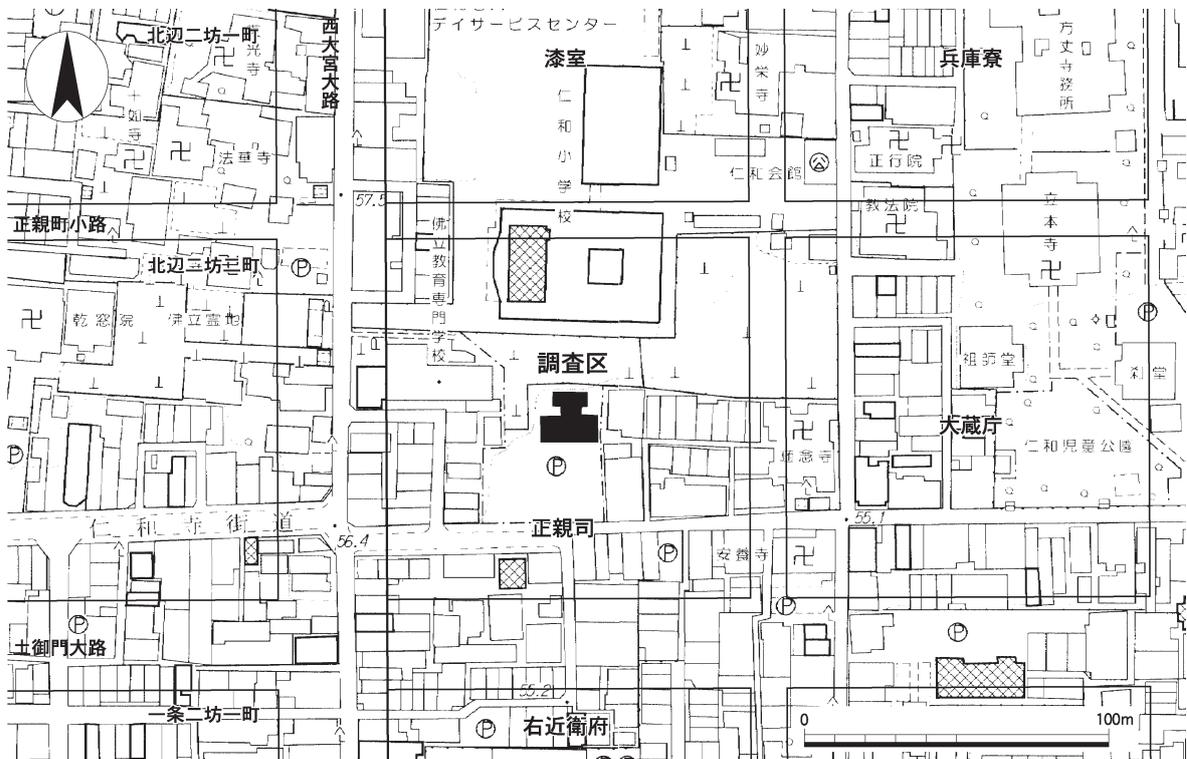


図1 調査区位置図 (1 : 2,500)

査の成果を公開した。この後、断割などの補足調査を行い、調査器材の撤去などの撤収作業に入り、9月15日に現場の引渡しを完了、すべての現場での作業を終了した。

調査終了後、直ちに図面整理、遺物洗浄、遺物実測などの整理作業に入り、報告書作成にあたった。作成作業は本書刊行をもって終了した。

(2) 位置と環境

調査地の鳳瑞町は上京区の北西部に所在し、標高は50mから60m前後を測る。調査地の一部は、北から南方向に広がる緩斜面の丘陵地で、かつては野と呼ばれる灌木や雑草が繁茂する高燥な原野であった。この丘陵は鷹ヶ峰の山裾部から始まり、調査地一部を包み込んで東南方の二条城からJR山陰線あたりを縁部として広がっている。この丘陵地は、地質学的には大阪層群中の新期洪積層で、48万年前までに堆積した海性堆積層が段丘化したものといわれる。しかし、調査地から南西方の一部は、ベースに砂礫や砂土が複雑に入り組んで堆積する地点が認められ、調査地もその例外ではない。これは旧紙屋川の氾濫による流路変更の結果による。流路移動による下刻と河川性の堆積が繰り返され、低平な自然堤防や浅い河道による起伏が生まれ、複雑な地形が形成された。この堆積層は約4万年前までに堆積したが、この時期を下って堆積を継続したとはみられていない。当初の紙屋川の流路移動域は調査地周辺を東限にして南西方域一部に及んでいたものの、下刻が進行するにつれて、北野白梅町交差点の東辺あたりに落ち着き、ほぼ固定化した流路は、この辺りから南西の方向へ流下したとみてとれよう。

調査地の北にある仁和小学校では、洪積層に由来する粘土性の堆積が広がるため、後世の粘土採取活動が活発で平安時代の遺構はほとんど遺存していない。しかし本調査地内の地山とみられる堆積層は礫質の砂土で、部分的に砂礫を含む泥土層や粘土層が複雑に入り組んで堆積し、粘土採取の対象地とみなされなかったことで、後世の破壊から免れたといえよう。

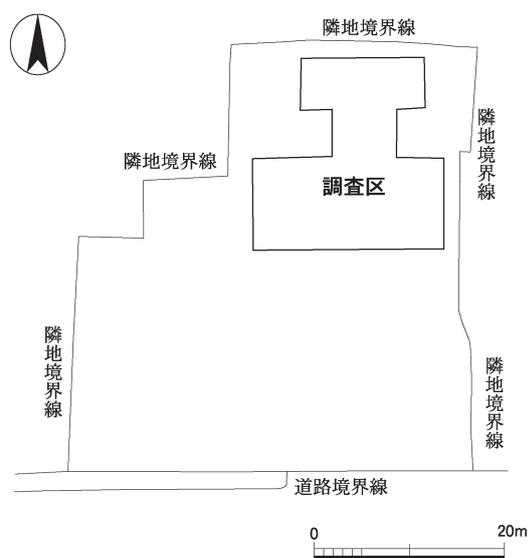


図2 調査区配置図 (1:800)

旧石器時代、縄文時代、弥生時代の遺跡は、調査地と周辺では発見されていないが、北野白梅町一帯に展開する北野遺跡からは、有舌尖頭器と呼ばれる縄文時代草創期の石器が出土しており、旧紙屋川の流路の固定化と安定がこの時期以前であったことを示唆している。

弥生時代の遺跡では、北野遺跡の南西部から大將軍小学校にかけての旧紙屋川沿いの低地で弥生時代前期の遺構・遺物が確認されている。

古墳時代後期から飛鳥時代には、調査地から南東にかけての地区にかけて鳳瑞遺跡があり、建物、土壙などが調査されている。奈良時代とみられる遺構は調査地から南へ100m付近でも



図3 調査前全景（南西から）



図4 作業風景

発見されており、円弧を描く溝が検出されている。調査地周辺の平安京造営以前の遺跡は概して疎らで、大部分は低木や雑草で覆われた原野状態で推移していたとみてとれよう。

平安時代に入り、平安京への遷都が行われると現在の一条通から南が平安京域となり、調査地は平安宮正親司として、平安宮の一角を占めることになった。調査地区が当初から正親司として設定され、采女司が併置されていた、などは確実とは言えないが、平安宮の西限である西大宮大路と、北限である一条大路に近い位置にある平安宮内西北地区の官司の一つであったことは間違いあるまい。平安時代中期から後期には、中心地区で火災が頻発し、数次の修築が施されて建物群は維持されてきた。しかし安元3年（1177）の大火では宮内の大半が焼亡し、鎌倉時代の承久の変以後は完全に放棄、内野と称された原野に還っている。調査地北方の平安京外で、後期の初めに北野天満宮が創建されている。この地は古くから雷神や天神地祇が祀られていたが、天徳3年（959）に藤原師輔が神殿を造営、勅祭とされ、天満天神が勅号とされている。

調査地近辺が再び開発され始めるのは桃山時代以降で、洛中からの寺地替えで移転する寺院が増加している。江戸時代には、さらに多くの寺院と墓地が営まれ、性親法親王の開宗と伝承される西光院が、調査地間近に伽藍を移転・造営するに至っている。

《参考文献》

- 京都市「平安の新京」『京都の歴史1』（株）学芸書林 1970年
- 京都市「第7巻上京区」『史料京都の歴史』（株）平凡社 1980年
- 横山卓雄『平安遷都と鴨川つけかえ』法政出版（株） 1988年

（3）周辺の調査（図5）

周辺の調査で最も早い時期の調査は、昭和52年（1977）の仁和小学校校舎増設に伴う発掘調査（1）であった。比定地が調査では大蔵省跡となっているが、漆室跡と隣の兵庫寮を分ける通路の一部が推定された位置の調査であった。調査の結果、江戸時代の遺構や粘土採取土壌によって削平が激しく、平安時代の遺構・遺物は検出されていないが、調査区の東西壁の中央に堆積土の乱れが認められ、南北方向の溝である可能性を残している。

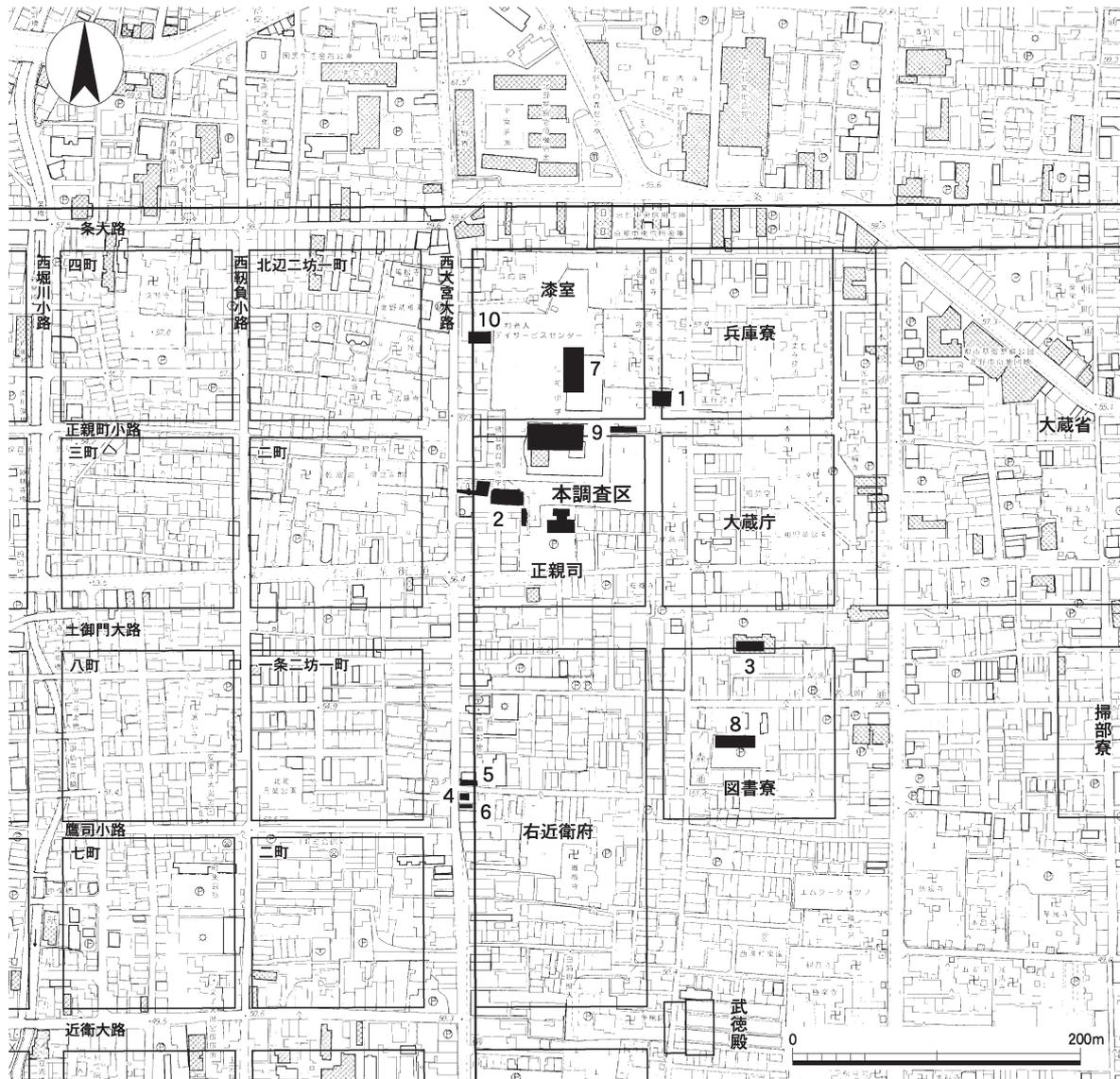


図5 周辺の調査位置図 (1:5,000)

文献 (番号は図5の調査地点番号に対応する)

- 1 鈴木廣司「102 平安宮大蔵省跡」『平安京研究資料集成 1 平安宮』柳原書店 1994年
- 2 平田 泰「101 平安宮正親司跡」『平安京研究資料集成 1 平安宮』柳原書店 1994年
- 3 平田 泰「付章 7 図書寮跡」『平安宮 I』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊 1995年
- 4 梅川光隆「平安宮西限」『平安京跡発掘調査概報』昭和60年度 京都市文化観光局 1986年
- 5 辻 裕司「平安宮西限(1)」『平安京跡発掘調査概報』平成2年度 京都市文化観光局 1991年
- 6 辻 裕司「平安宮西限(2)」『平安京跡発掘調査概報』平成2年度 京都市文化観光局 1991年
- 7 辻 裕司「平安宮鼓吹司跡」『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1989年
- 8 辻 裕司「平安宮図書寮」『平安京跡発掘調査概報』平成元年度 京都市文化観光局 1990年
- 9 長戸満男「平安宮正親司・漆室跡」『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2000年
- 10 大立目 一『平安宮漆室跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2001-4 2002年

昭和 53 年（1978）には、本門佛立宗第二佛立会館新築に伴う発掘調査（2）が実施された。この調査では平安時代前期の溝を 2 条、柱穴を 11 基、同中期の溝を 1 条、同後期の溝 1 条を検出している。前期の溝は幅 1 m 前後、深さ 0.2 m の南北溝と、幅 2 m、深さ 1 m の東西溝が検出された。柱穴は径が 0.3 m、深さ 0.3 m を測り、南北溝の西側に 5 基、東側に 3 基が、東方に 12 m 前後を離して 3 基が検出されている。平安時代中期の溝は幅 1.5 m、深さ 0.6 m で、西に高まる路面状の遺構を伴っており、平安宮西面の隍と西大宮大路の路面を検出したものとみられる。叩き締められた路面が隍の堆積下に潜り込んでおり、隍の堆積と路面の新旧が確認できる。隍の遺物は 10 世紀前半のものが出土している。平安時代後期の溝はその西側に 2 m 前後を離れた上層で成立している。12 世紀後半の出土遺物が出土し、この時期の隍とみられるもので、隍が修復を受ける度に路面側に遷移する傾向を確認できる資料として貴重であろう。また、平成 2 年（1991）の市域立会調査で平安時代後期の南北溝が南側隣地で検出された。地表下 0.4 m で検出されたこと、位置的にも合致することから同一の溝であり、後期の隍の延長とされている。

昭和 54 年（1979）には、南東方向にある図書寮跡で事務所建設に伴う発掘調査（3）が実施されている。調査地が図書寮跡の北限に近接した位置に比定され、区画に関係した遺構の検出が期待された。しかし江戸時代の遺構や粘土採取の大規模な土壌に削平されており、明確な区画関係の遺構は検出されなかった。しかし平安時代前期の遺物が出土する土壌の一部が確認され、将来の遺構検出に期待を抱かせた調査であった。

平安宮西限に関しては、興味深い調査例が昭和 60 年（1985）と平成 2 年（1990）に実施されている。昭和 60 年の調査（4）では、地表下 0.3 m の盛土層の除去後、幅 1～2 m 前後、深さ 0.4 m 前後の溝が 6 条ほど検出された。出土遺物はいずれも 10 世紀前半のもので、隍が時期的に変遷したものと報告がなされた。しかし、東から西方向への暫進的な遷移ではないことに問題を残した。これを解決したのが、平成 2 年度の調査で、昭和 60 年度調査を挟んだ南北で調査が実施されている。北側の調査（5）では地表下 0.3 m 前後の盛土除去後に、幅 2 m 前後、深さ 0.5 m 前後の溝を調査区東側に 4 条、南側の調査（6）でも同規模の溝 4 条を調査区東側で検出している。いずれも西端の溝を平安時代後期とし、東側 3 条を中期とされており妥当といえよう。これを昭和 60 年度の調査と比較すると、昭和 60 年度調査西側溝 3 条を後期の溝、他を中期の溝と捉えなおせば、平成 2 年度調査の結果と大きな矛盾がなくなり、すべてではないにしろ、問題は整理されると言えよう。

昭和 61 年（1986）には仁和小学校の屋内体育館が増改築に伴う発掘調査（7）が実施された。報告では平安宮鼓吹司跡とあるが平安宮漆室跡と比定地は同一である。調査では大規模な粘土採取の土壌が確認され、平安時代の遺構は検出されていない。粘土採取の後の整地土層の上面で整然と並んだ多数の土壌が検出された。土壌からは人骨の出土があり、墓と確認されている。粘土採取土壌を除外すれば遺構面は浅く、今後の調査に期待されている。

図書寮跡は平成元年（1989）にも集合住宅建設に伴う調査（8）が実施されている。位置は図書寮跡の推定中心部であるが、大規模な粘土採取の土壌による削平が激しく、平安時代遺構の検

出に至っていない。しかし、粘土採取土壌や江戸時代の遺構から平安時代前期の遺物が出土しており、遺構の存在を裏付けている。

平成10年（1998）には、調査地に近接した仁和小学校の校舎改築工事に伴う調査（9）が実施された。2箇所にあたる700㎡に達する調査区を設定した調査であったが、江戸時代を中心にした大規模な粘土採取土壌による遺構の削平が広範囲に及び、平安時代の遺構を検出することはできなかった。しかし出土遺物は、平安時代前期から後期、鎌倉時代、桃山時代から江戸時代の遺物が出土している。

さらに最近の調査は、仁和小学校の北西部で調査が行われている。平成14年（2002）に仁和老人センター建設に伴う調査（10）で、漆室と平安宮西面大垣（西大宮大路東築地）に比定される好位置の調査であった。しかしこの調査でも残念ながら、江戸時代後期を中心にした粘土採取土壌が縦横に確認されて、平安時代の遺構は検出されていない。しかし少量ながら平安時代前期に遡る遺物の出土があり、平安宮最西北部に位置した漆室跡ではあるが、平安時代前期に何らかの施設が存在したことが窺えよう。

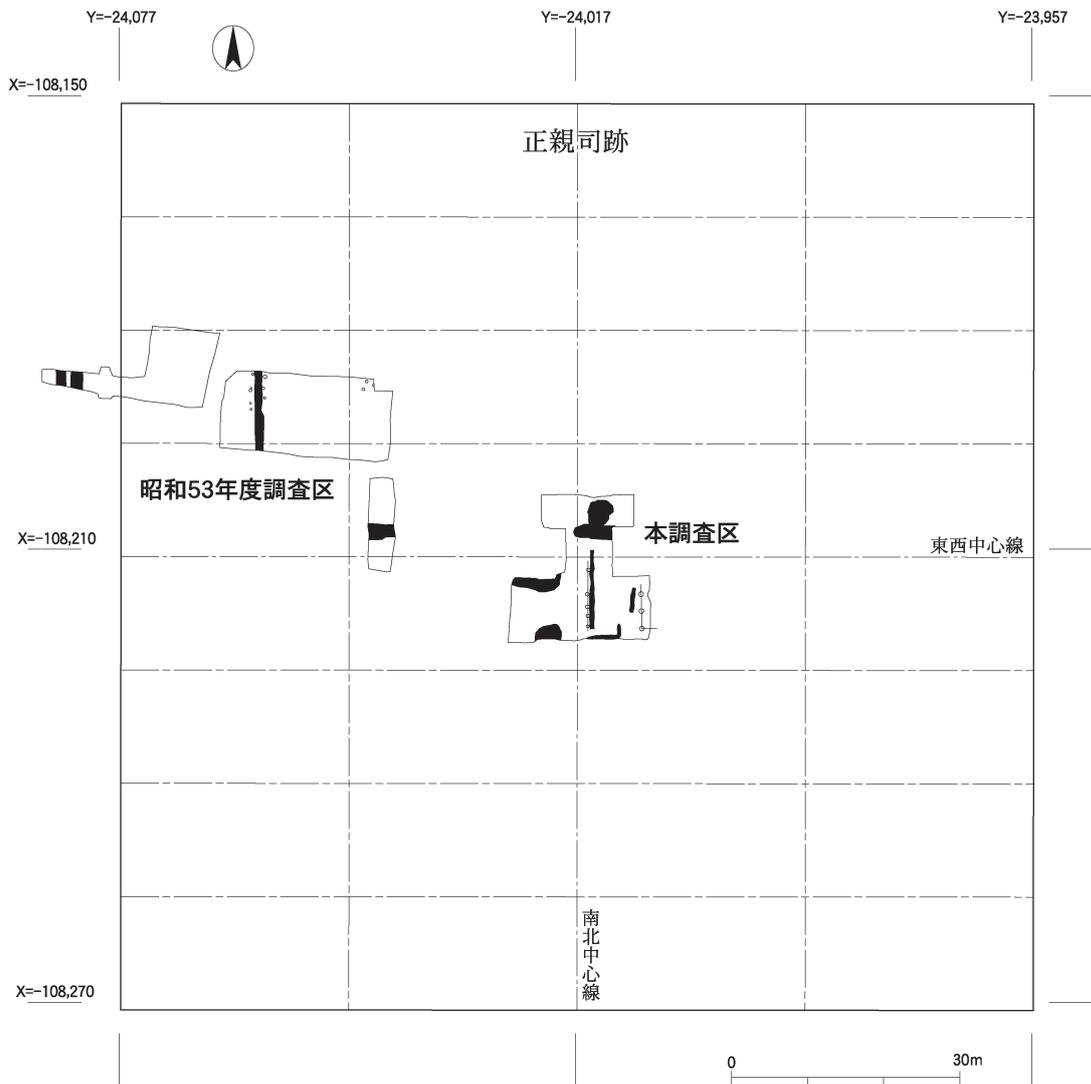


図6 正親司跡位置図（1：1,000）

2. 遺 構

(1) 遺構の概要

調査区の基本層序は、現代盛土層（約 1.0 m）、近代以降の整地層（約 0.2 m）、江戸時代の堆積層（0.2 m）、平安時代から中世の堆積層（0.2 m）、地山となっている。地山上面の傾斜は北西部が高く、南東方向に下がる。平安時代前期から中期の遺構は、この地山面で成立し、平安時代から中世の堆積層を排土して検出できる。平安時代後期以降から江戸時代前半期の遺構は検出していない。江戸時代の遺構は江戸時代後半期以降のもので、整地層、柱跡、土壇が検出される。近代以降の整地層や攪乱坑は、江戸時代の堆積層や遺構を切り込み、その上面に成立している。

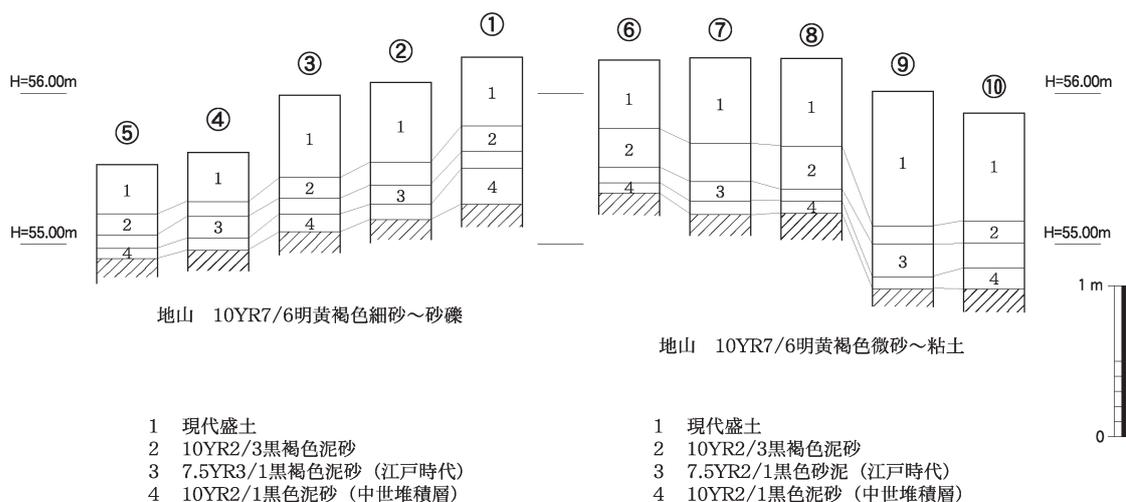
検出した遺構は、平安時代前期の溝 4 条・土壇 3 基・柵 1 条・建物 1 棟・柱穴、平安時代中期の柱穴、江戸時代後期の整地層・土壇・柱跡がある。

(2) 検出遺構

溝 1 (図 9) は調査区北側中央で検出した。東西方向で、幅 1.8 m、深さ 0.4 m を測る。調査区西壁の手前 1 m 付近で浅くなり上がりきる。レンズ状の堆積がみられ、恒常的な水流の痕跡は認め難い。上層に黒褐色砂泥層、中層から下層に黒色泥砂層が堆積する。

溝 2 は調査区中央で南北に検出した。幅 0.7 ~ 0.3 m、深さ 0.05 ~ 0.15 m を測る。溝断面は角を落とした逆台形を呈する。約 10 m 分を検出したが、さらに、調査区北端に溝痕跡を確認しているので、北側調査区外に延びるとみられる。溝の堆積土は黒色砂泥で、径 5 cm 前後の礫が混入する。溝は北に浅く南に深くなるが、これは遺構面の傾斜と北側の削平が大きいためと観察される。

溝 3 は調査区南東側で検出した。北から延びて西に屈曲し、再び南に曲がって延びる。幅は 0.5 ~ 0.7 m 以上、深さは 0.1 ~ 0.4 m を測る。南に曲がる位置で溝 2 と合流している。堆積土は黒



*断面位置は平面図に表記

図 7 調査区断面柱状図（1：50）

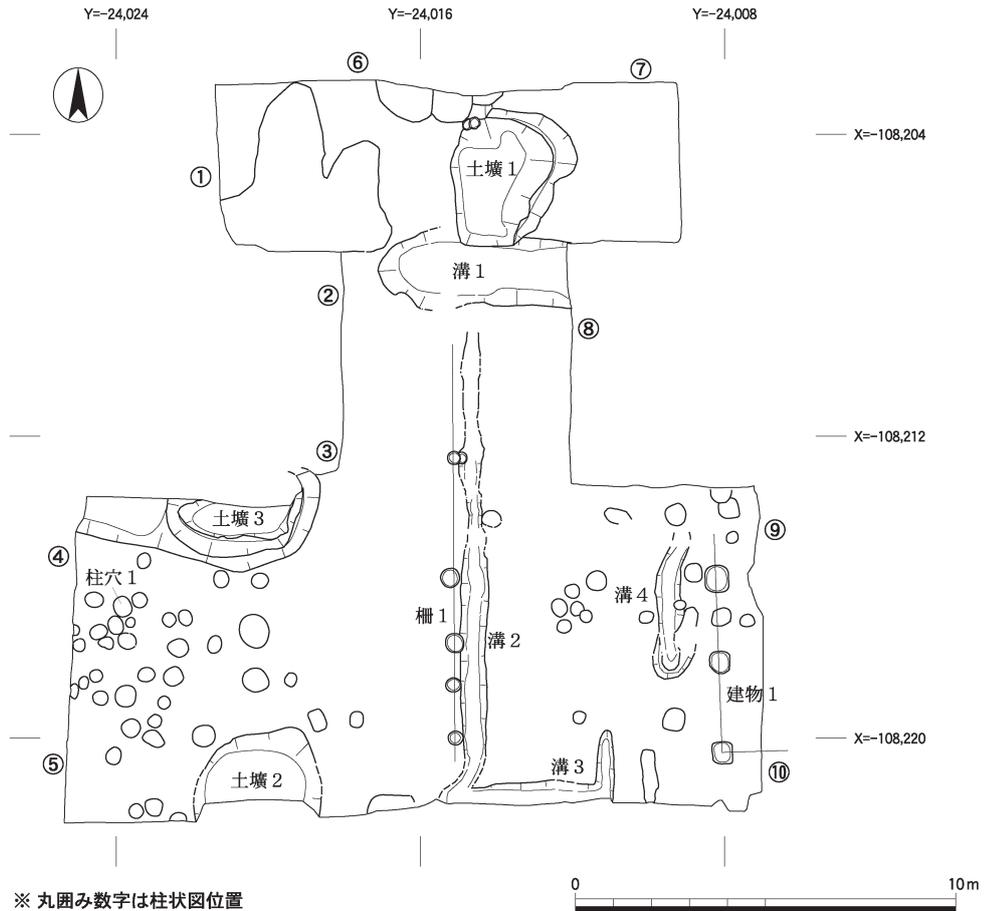


図8 調査区遺構平面図（1：200）

色泥砂で、レンズ状の堆積が認められ、水流痕跡に乏しい。

溝4は調査区南東中央に検出した。幅0.5m、深さ0.1mを測り、3.5m分を確認している。やや蛇行気味であるが概ね南北に延びる。黒褐色泥砂がレンズ状に堆積する。

土壙1（図9）は調査区北側で検出した。不定形で、南西部が方形、北東部が円形となる。南北にやや長く、長径が3.5m、短径が3.0mを測り、深さは0.4mを測る。底部は皿状に窪み、黒色泥砂層がレンズ状に堆積する。遺物は中層・下層から多く出土し、上層は小破片の遺物が出土した。

土壙2は調査区南西側で検出した。平面形が隅丸の方形で、東西3.5m、南北2.0m以上、深さ1mを測る。断面形は横広のU字形を呈し、黒色泥砂を主体にしたレンズ状の堆積が認められる。下層からの出土遺物は少ないものの、中層から上層にかけては土器類、瓦類、炭片、焼土塊が出土した。

土壙3（図10）は調査区中央西地区で検出した。北側部分が壁面にかかる。東西6m以上、南北2.5m以上を測るが、土壙北東部の精査で土壙北側の肩の一部が確認され、規模の推定が可能になった。これによれば、南北の規模は3mと推定される。深さは西側部分が1.1m、東側が1.6mを測る。東側に深く、西側に浅いが、堆積土層には時期差を示す切り合いは認められない。黒色泥砂が主として堆積し、緩やかなカーブのレンズ状堆積が確認できる。下層には出土遺物は少

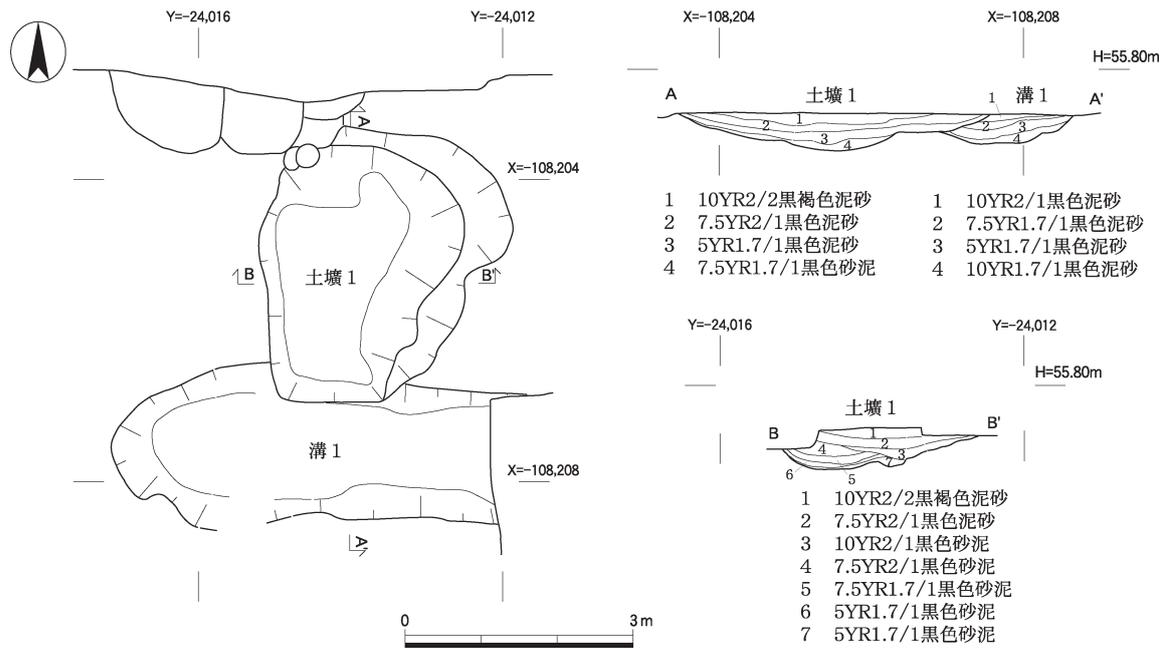


図9 土壌1・溝1実測図(1:100)

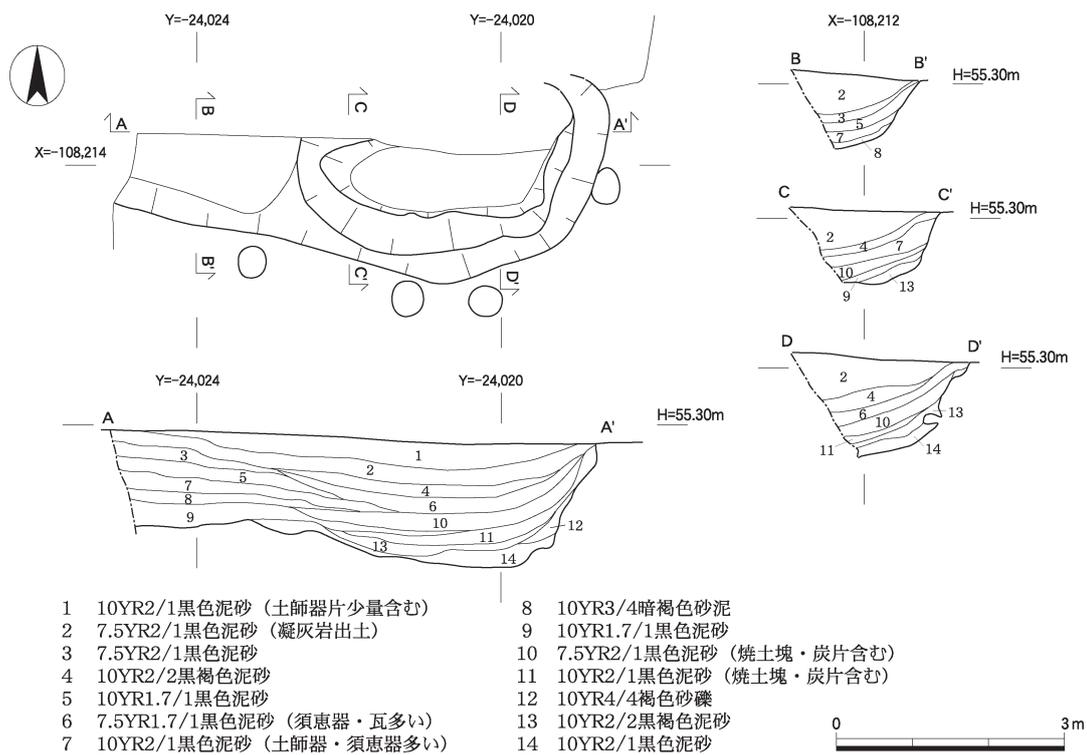


図10 土壌3実測図(1:100)

なく、中層に土器類、瓦類、炭片、焼土塊を多量に混入する。上層は遺物の小片が多く、出土量も減少する。

柵1(図11)は溝2の西に沿って南北に延びる。柱穴の径は0.3~0.5m前後のものがあり、深さは0.05m前後を測る。柱穴は南側での検出が多く、北側ではほとんど遺存しない。柱穴は比較的浅いものが多いことと、調査区の北側がより深く削平を受けた結果とみられる。

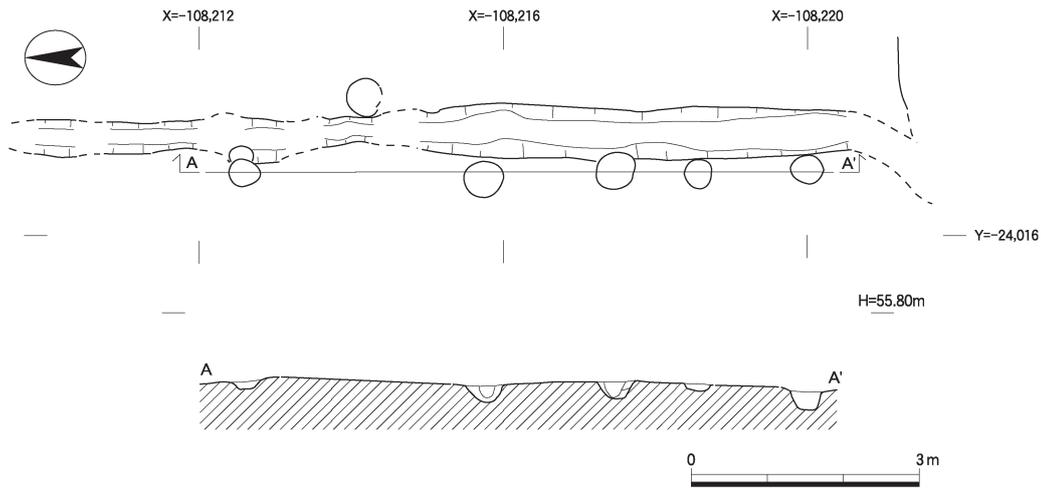


図 11 柵 1 実測図 (1 : 100)

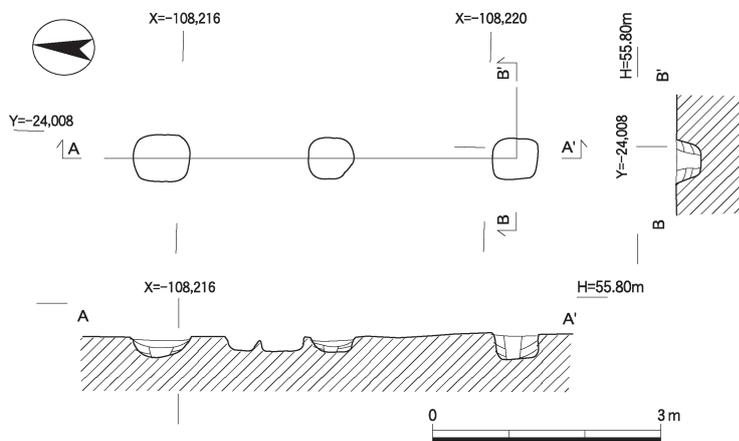


図 12 建物 1 実測図 (1 : 100)

建物 1 (図 12) は調査区南東部で検出した。柱穴は平面形が隅丸長方形で、長辺が 0.6 m、短辺が 0.5 m を測る。深さはいずれも 0.4 m を測る。柱間は 2.4 m (8 尺) で、東西棟か南北棟の南西隅部分を検出したものと捉えている。

柱穴は南東部を中心に 18 基を検出したが、建物あるいは柵としてまとまるものは確認できない。柱穴掘形は円形のものも多く、径は 0.2 ~ 0.5 m を測り、深さは 0.3 m 前後のものが多数である。

柱穴群は調査区南西部を中心に 30 基以上を密集して検出した。平面形は円形を呈し、径が 0.3 m を測るものが多数を占める。この位置での頻繁な建替を示したものとみられる。このうちの柱穴 1 から平安時代中期に属した土師器皿片が出土している。周辺のすべての柱穴が同期のものとは断定できないものの、多くの柱穴がこの時期に下る可能性が高い。

江戸時代の土壌は廃棄孔で、柱跡は江戸時代の寺院建物に関係したものとみられる。

表 1 遺構概要表

時代	遺構	備考
平安時代前期	溝 1 ~ 4、土壇 1 ~ 3、柵 1、建物 1、柱穴	
平安時代中期	柱穴	
江戸時代後期	整地層、土壇、柱跡	

3. 遺物

(1) 遺物の概要

出土した遺物は、平安時代前期の土師器皿・椀・杯・蓋・高杯・甕、須恵器皿・杯・蓋・壺、黒色土器椀、緑釉陶器椀、灰釉陶器皿・椀、平瓦、丸瓦、緑釉瓦片、焼土塊、炭片、鉄片、不明銅製品、凝灰岩片がある。土壌・溝・柱穴から出土したもので、特に土壌1・2・3からは土器類・瓦類が多量に出土している。

各土壌から出土した遺物の器種別破片数を以下に記して、出土量の概略把握の目安にしたい。

土壌1 出土遺物（土師器 594 片、須恵器 209 片、灰釉陶器 3 片、緑釉陶器 10 片、黒色土器 14 片、瓦 53 片、炭 1 片）

土壌2 出土遺物（土師器 218 片、須恵器 161 片、緑釉陶器 4 片、黒色土器 5 片、銅製品 1 片）

土壌3 出土遺物（土師器 3419 片、須恵器 443 片、緑釉陶器 16 片、灰釉陶器 7 片、黒色土器 21 片、瓦 220 片、炭 110 片、凝灰岩片）

平安時代中期の遺物は土師器皿、須恵器壺が柱穴から出土している。江戸時代の遺物は、調査区上層の遺構から出土したもので、陶器甕、施釉陶器椀・壺、染付磁器皿・椀・壺が出土した。また近代以降の攪乱から染付磁器椀・鉢・壺が出土している。

(2) 出土遺物

土壌1 出土遺物（図13、図版3）

図化した遺物は土師器椀・高杯・甕、黒色土器椀、須恵器蓋・壺・甕がある。

1は土師器椀で、口径15.6cm、器高4.5cm以上を測る。底部は欠損し、体部は内湾気味に斜め

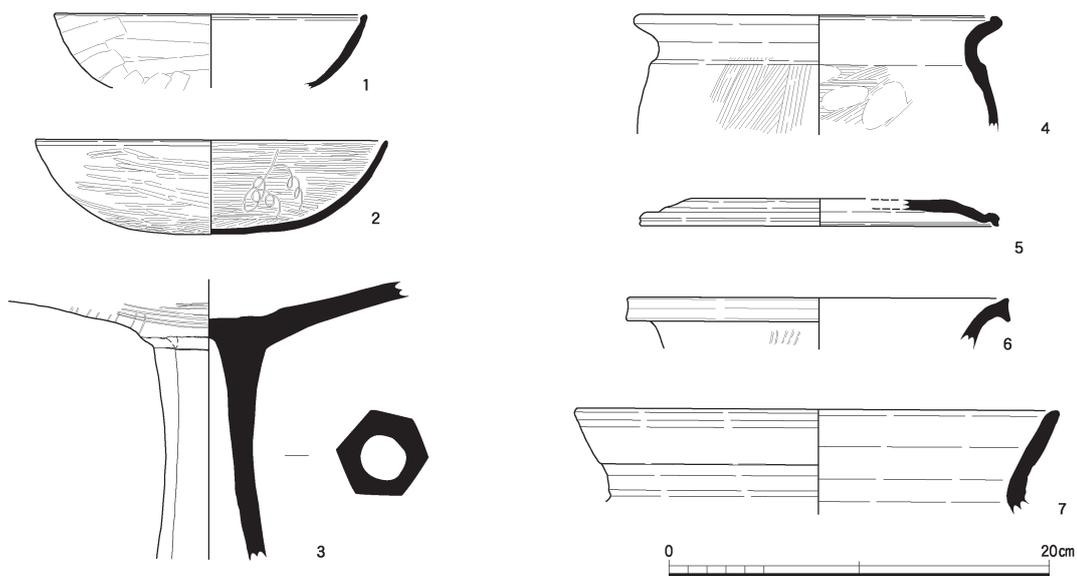


図13 土壌1 出土遺物実測図（1：4）

上方に立ち上がる。口縁部は上方に延び、端部は内側斜め上方に小さく肥厚する。外面を口縁部までケズる。2は黒色土器碗で、口径 18.6 cm、器高 5.0 cmを測る。低部から体部は内湾しつつ立ち上がり、口縁端部は丸く収める。内面底部は縦方向、体部から口縁部は横方向の緻密なミガキを施し、螺旋形の暗文を描く。内面を黒色化したAタイプとみられる。外面は、底部に丁寧なミガキを、体部にやや疎らなミガキを施す。3は土師器高杯で、皿部の先端と脚部を欠く。残存高 14.0 cmを測る。脚部は筒状で、外面を6面にケズリ出す。脚部上端に皿部との接合痕跡が確認できる。皿部の内外は縦方向の疎らなミガキが施される。4は土師器甕で、口径 19.5 cm、器高 6.0 cm以上を測る。体部下半を欠く。体部上半は内湾しつつ立ち上がり、口頸部で大きく外反、口縁端部は丸く上方に摘み上げる。外面に縦方向と斜め方向のハケメ、内面に横方向と斜め方向のハケメがみられ、指頭によるオサエで仕上げる。5は須恵器蓋で、口頸は 19.0 cm、器高 1.3 cmを測る。天井部中央を欠く。口縁部は下方に小さく屈曲し、端部は摘まれて外方に踏ん張る。6は灰釉陶器壺で口縁部のみが残存する。口頸 20.5 cm、器高は 2.5 cm以上を測る。口縁部は外反し、端部は肥厚して外方で面を為す。7は須恵器甕で、口頸部上端から口縁部のみが残存する。口縁部は斜め上方に直線的に延びて端部は丸く収める。

溝1出土遺物 (図14・15)

図化した遺物は土師器碗、須恵器蓋、須恵器壺、緑釉不明製品が出土した。8は土師器碗で、口頸 16.5 cm、器高 4.2 cm以上を測る。体部は内傾気味に立ち上がり、口縁端部は上方に摘み上げられ、内面に擬凹線が巡る。外面に横方向のケズリを施す。9は土師器碗で、底部を欠く。口径は 18.2 cm、器高 4.2 cmを測る。体部は内傾気味に立ち上がり、口縁端部は上方に摘み上げる。外面をケズリで仕上げる。10は須恵器蓋で天井部中央を欠く。天井部は直線的に横方向に延び、裾部は斜め下方に延びて端部は小さく摘まれ、丸く収まる。天井部外面をケズリで仕上げる。11は須恵器壺で、口縁部を欠く。体部径は 5.1 cm、器高は 3.1 cmを測る。平坦な底部と直線的に上方に延びる体部から成る。器壁は 0.7 cm前後を測る。外面底部に糸切り痕跡が確認される。用途に関しては不明である。12は緑釉不明製品で、断面は半円形、円頭状で裏面はわずかに窪む。径が 3.8 cm、高さ 1.5 cmを測る。円頭の表面に緑釉が掛かる。

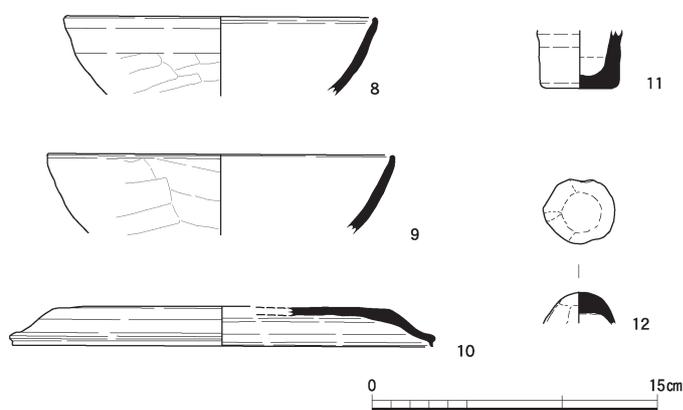


図14 溝1出土遺物実測図 (1 : 4)

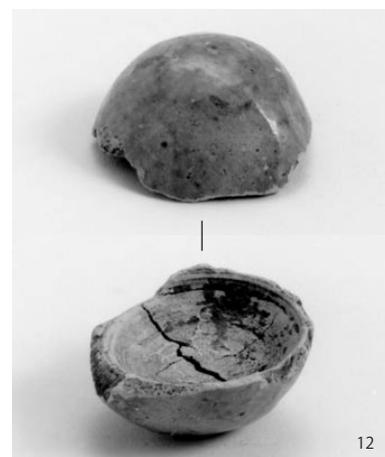


図15 溝1出土緑釉不明製品

土壌 2 出土遺物 (図 16、図版 3)

図化した遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・壺がある。13 は土師器皿で、口径 15.8 cm、器高 2.4 cm を測る。底部から体部は内傾気味に立ち上がり、口縁端部を摘み上げ、丸く収める。外面はケズリによって仕上げる。14 は土師器椀で、口径 13.8 cm、器高 3.5 cm を測る。体部は内傾して斜め上方へ立ち上がり口縁端部を軽く摘み上げる。外面はケズリで仕上げる。15 は土師器椀で、口径 13.8 cm、器高 3.2 cm を測る。体部は内傾気味に斜め上方へ立ち上がり、口縁端部は丸く収める。外面をケズリで仕上げる。16 は土師器杯で、口径 18.0 cm、器高 3.6 cm を測る。底部は平坦で、体部は直線的に斜め上方に延び、口縁端部を上方に摘み上げ、内面を擬凹線に仕上げる。外面はケズリを施す。

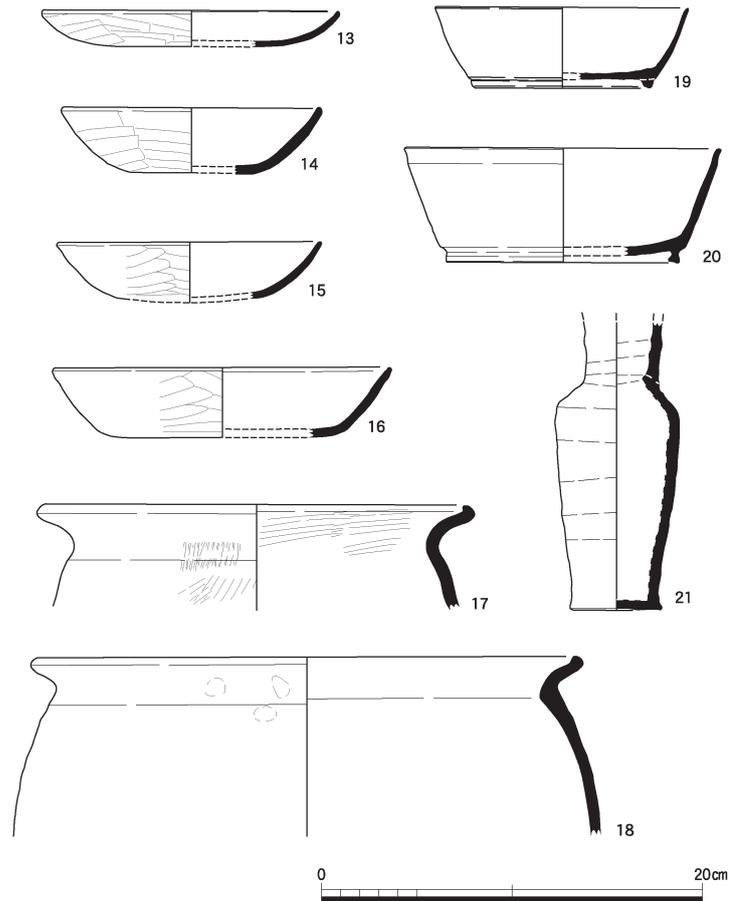


図 16 土壌 2 出土遺物実測図 (1 : 4)

17 は土師器甕で、口径 23.2 cm、器高 5.5 cm 以上を測る。体部の大部分を欠く。頸部は丸く外反し、口縁端部を内側に丸めて収める。頸部内面をハケメ調整、外面にタタキの後にハケメを施す。18 は口径 29.2 cm、器高 9.5 cm を測る。体部下半以下を欠く。体部上半は内傾して立ち上がり、頸部は屈曲して外反する。口縁端部は上方に丸めて収める。頸部外面にオサエの痕跡が認められる。19 は須恵器杯で、口径 13.5 cm、器高 4.3 cm を測る。平坦な底部の端面に断面が逆台形の低い高台を貼り付ける。内傾気味の体部は斜め上方に延び、口縁端部は丸く収める。20 は須恵器杯で、口径 16.7 cm、器高 6.0 cm を測る。平坦な底部の端部に内側に踏ん張る高台を貼り付け、体部は直線的に斜め上方に立ち上がる。口縁端部を上方にナデ上げて丸く収める。21 は須恵器壺で、口径 6.5 cm、器高 15.0 cm 以上を測る。平坦な底部から、体部は直線的に立ち上がり、内傾する肩部から細長く上方に延びる頸部が取り付く。底部外面に糸切りの痕跡が認められる。

土壌 3 出土遺物 (図 17 ~ 22、図版 3)

図化した遺物は土師器皿・椀・杯・蓋・甕、須恵器蓋・皿・壺・杯・鉢・甕、緑釉陶器椀・杯、灰釉陶器椀がある。22 ~ 40 は土師器皿で、口縁端部を摘み上げて丸め、内面が擬凹線状を呈するに至ったものと、口縁部が外反もしくは外反気味で、端部を丸く収めるものが認められる。23 ~ 28 が前者で、口径が 15.7 ~ 20.9 cm、器高が 2.0 ~ 3.2 cm のものがある。外面にケズリ調整が

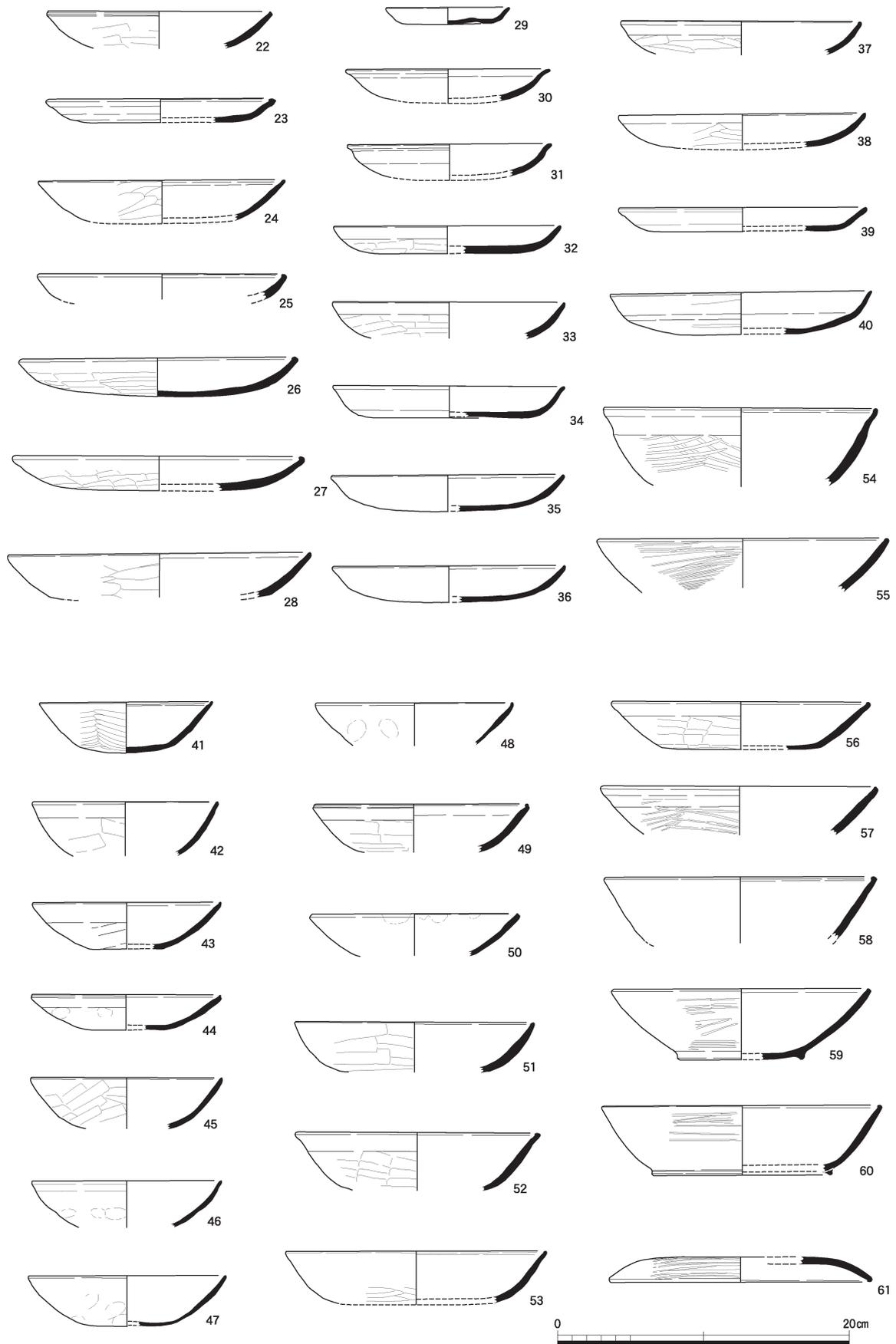


图 17 土壙 3 出土遺物実測図 1 (1 : 4)

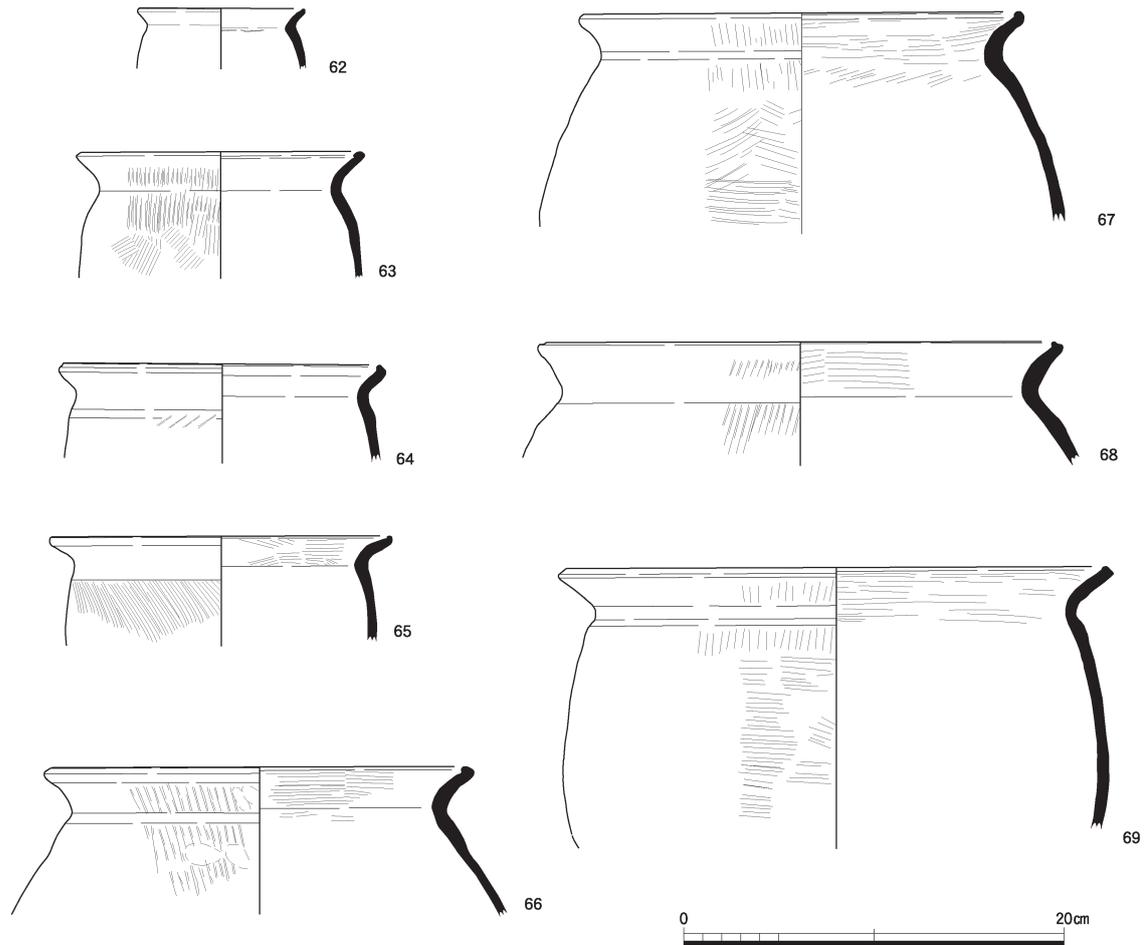


図 18 土壙3 出土遺物実測図2 (1:4)

施されるが、体部以下をケズるものが大半で口縁部に達するものは稀である。29～40が後者で、口径は14.2～18.1 cm、器高は2.4～2.8 cmを測る。29は口径8.5 cm、器高1.2 cmで、極めて僅少である。底部はやや丸みを持って体部に繋がり、体部は緩やかに内傾しながら斜め上方に延びる。口縁部は外反が明瞭なものと心持ち外反するものがみられ、端部は丸く収める。外面のケズりは体部下半でわずかに認められるものと認められないものが併存する。41～55は土師器碗で、口径12.0～20.2 cm、器高は3.5～5.8 cmのものがある。比較的丸みを持った底部から内傾気味に立ち上がる体部を持つ。口縁部は上方に丸め上げ、内面の擬凹線が明瞭なものと不明瞭なものがある。外面の調整はミガキを施すもの、体部下半にケズリを施すものの、オサエのみによるものが認められる。56～60は土師器杯で、口径18.0～19.4 cm、器高3.5～4.8 cmのものがある。底部は平坦で、断面三角形の低い高台を貼り付けるものと高台を持たないものがある。体部は直線的に斜め上方に立ち上がり、口縁端部は上方に丸め上げられ、内面に不明瞭な擬凹線を持つ。外面の調整は体部下半をケズるするものと、疎らなミガキを施したのものがある。61は土師器蓋で、口径18.5 cm、器高1.7 cmを測る。丸みを持った天井部から内傾して口縁部に至り、口縁端部は丸めて収め、内面に擬凹線を持つ。外面はミガキで調整を施している。62～69は土師器甕で、口径9.0～29.5 cmのものがある。体部から頸部へ内湾しながら立ち上がり、頸部は屈曲して外反し

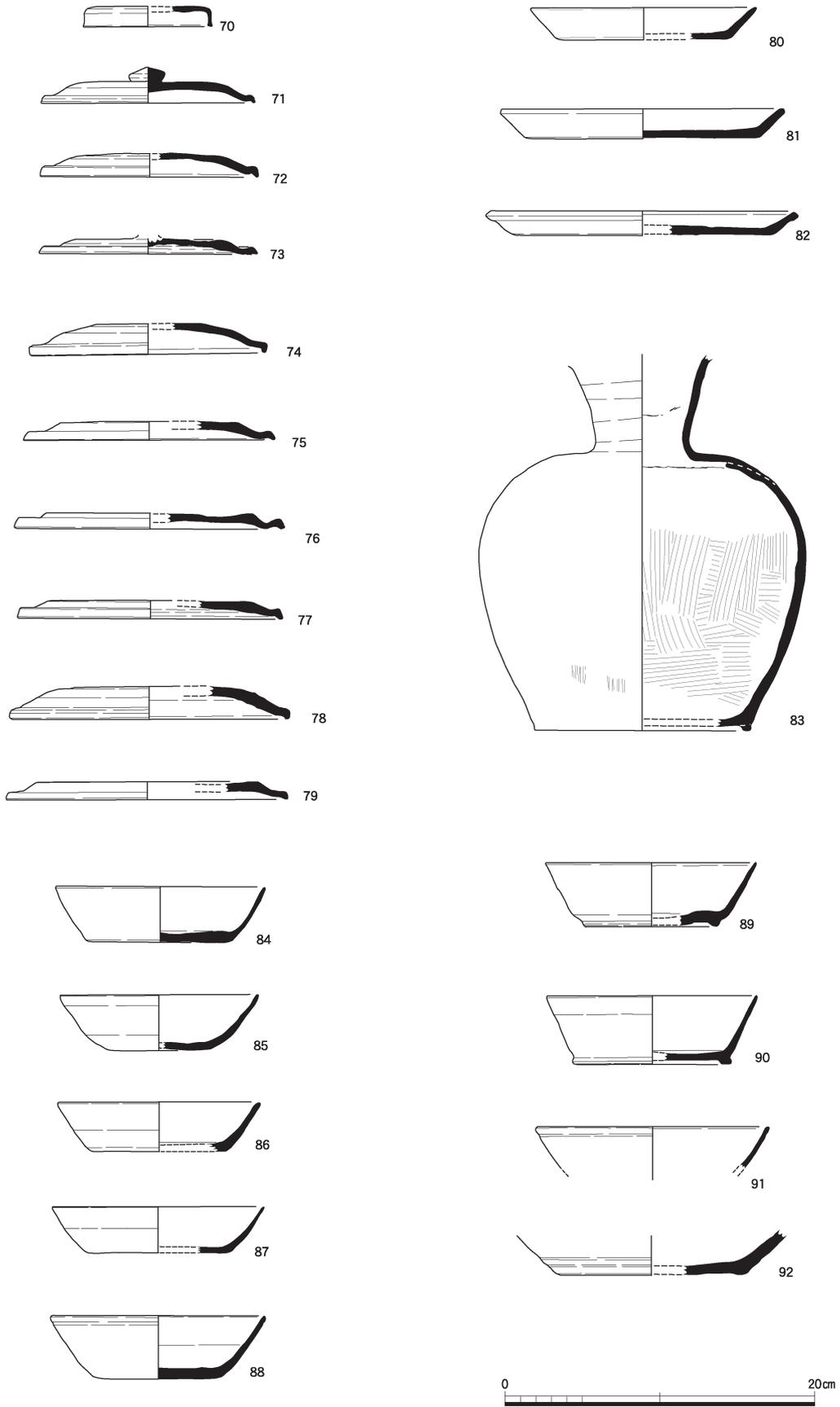


图 19 土壙 3 出土遺物実測図 3 (1 : 4)

て口縁部に至る。口縁端部は上方に丸め上げ、内面に擬凹線を作る。擬凹線は明瞭なものと同明瞭なものが認められる。内面の調整は口縁部を横方向のハケメを、外面は体部をタタキによる整形の後、ハケメによる調整を施す。70～79は須恵器蓋で、70は口径8.3cm、器高1.5cmを測る。天井部は平坦で、口縁部は直線的に短く下方に延び、端部は小さく肥厚して地側下方に面を持つ。71～79はほぼ同様の形態で、低い宝珠形の摘みを持つものと持たないものがある。口径は14.0～18.6cm、器高は2.0～3.0



図20 土壙3出土墨書土器

cmを測る。平坦な天井部から口縁部は斜め下方に屈曲して延び、口縁端部を下方に折り曲げて作る。80～82は須恵器皿で、口径15.2～20.4cm、器高は2.0cm前後を測る。平坦な底部から斜め上方に体部が延び、端部は丸く収めるものと外方に肥厚して玉縁状を呈したものがある。82は底部外面に墨書が認められる(図20)。83は須恵器壺で、口縁部を欠く。体部径21.4cm、器高24.7cm以上を測る。幅広の底部端に断面四角形の高台を貼り付ける。体部下半は内傾気味に上方に延び、体部上半は内湾して頸部に至る。頸部下端で大きく外反し直線的に斜め上方に延びる。外面はタタキ痕跡をナデによって摺り消す。84～91は須恵器杯で、口径15.2～19.0cm、器高3.4～4.4cmを測る。高台を持つものと持たないものがある。平坦な底部から体部が直線的に斜め外方に延び、口縁端部は丸く収める。92は須恵器鉢で、底部径12.5cm、器高2.4cm以上を測る。底部は平坦

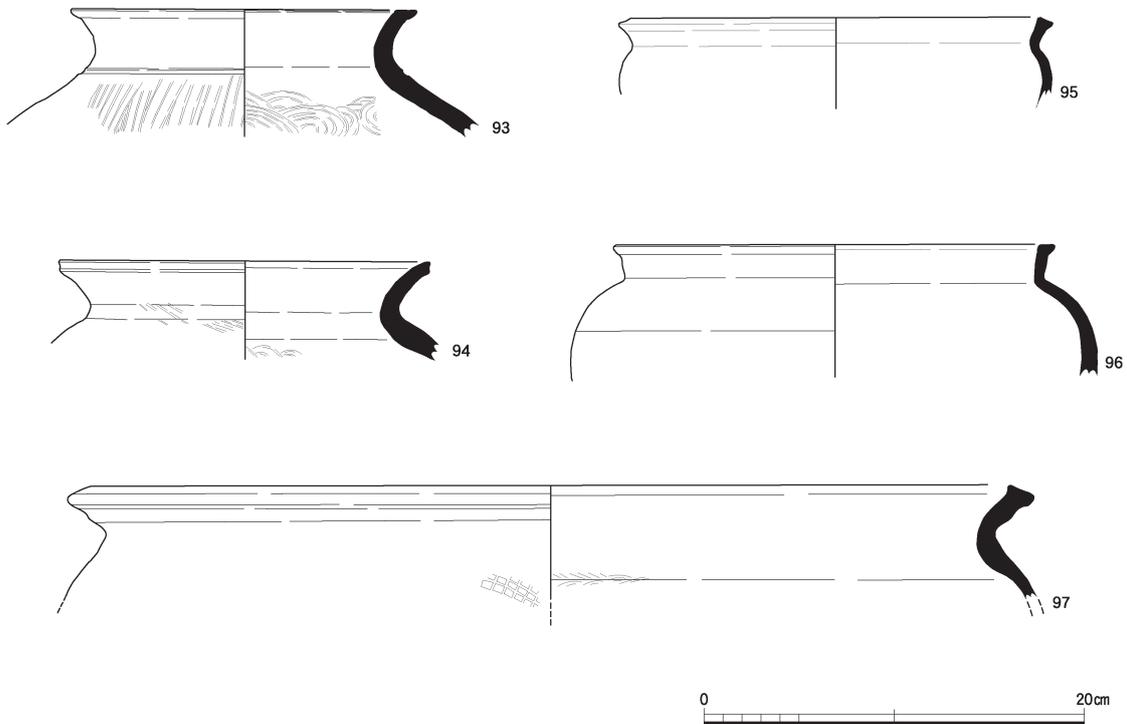


図21 土壙3出土遺物実測図4 (1:4)

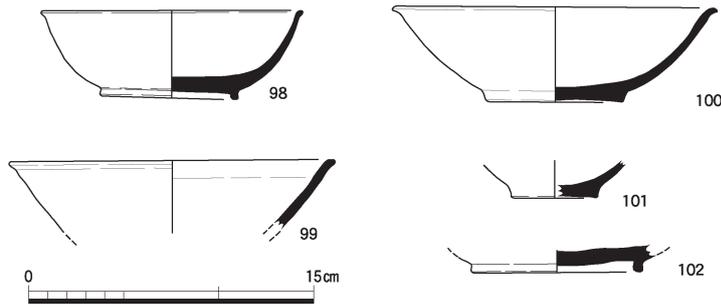


図22 土壙3出土遺物実測図5 (1:4)

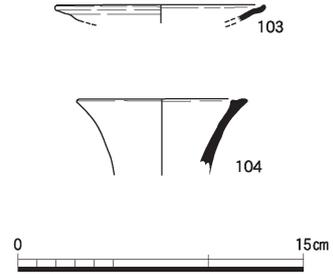


図23 柱穴1出土遺物実測図 (1:4)

で、端部は小さく盛り上がり、擬高台を持つ。体部下半は斜め上方に直線的に延びて立ち上がる。93～97は須恵器甕で、93と94は口径18.4～19.4cm、器高7.4cm以上を測る。体部から口縁部にかけて大きく外反し、端部は肥厚しない。内面と外面にタタキの痕跡を残している。95～97は口径22.8～56.0cmを測る。内湾した体部からくの字に短く屈曲し、口縁端部は上下に肥厚して幅広の面を作る。内外のタタキ痕跡を丁寧に摺り消す。98と102は灰釉陶器碗で、98は口径14.2cm、器高4.8cmを測る。平坦な底部端に小さな高台を貼り付け、体部は内傾気味に立ち上がる。口縁部は短く外反し、端部は小さく肥厚して丸く収める。102は底部のみが遺存する。高台径8.4cmを測る。底部の端に断面四角の小さな高台を貼り付ける。99～101は緑釉陶器碗で、99は底部を、101は体部以上を欠く。口径17.2～17.5cm、器高5.0cm前後を測る。体部は内傾気味に斜め上方に延び、口縁部は外反し、端部は丸く収める。底部は100が削り出しの円盤高台で、101が糸切りの痕跡を残している。

柱穴1出土遺物 (図23)

103は土師器皿で、口径10.4cm、器高1.2cm以上を測る。口縁部のみが遺存した。体部は内傾気味に立ち上がり、口縁部は短く外反して端部を摘み上げて丸く収める。104は灰釉陶器壺で、口縁部のみが遺存した。口径9.1cmを測る。頸部は大きく外反して延び、口縁部は肥厚して上方に面を成す。

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代前期	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、瓦、緑釉製品		土師器60点、須恵器36点、緑釉陶器3点、灰釉陶器2点、緑釉製品1点		
平安時代中期	土師器、灰釉陶器		土師器1点、灰釉陶器1点		
江戸時代	陶器、施釉陶器、染付磁器				
合計		33箱	104点 (3箱)	18箱	12箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より3箱多くなっている。

4. ま と め

調査で検出した東西方向溝、南北方向の溝は、正親司の南北・東西の中心推定ラインに近接した位置で確認されている。東西方向の溝1は推定ラインより約3m北側に、南北方向の溝2は約2m東側に検出された。溝1は2m近い幅を持ち、溝2は西側直近に柵1を伴っているなど、いずれも優れた区画性が窺え、官司内をその利用目的によって区画した施設とみてよからう。

溝1に関しては、西隣の昭和53年度調査、南区SD1が方向、規模、堆積土、時期が一致しており、同一の溝の東への延長と考えて矛盾はない。溝1が西で上がることは、正親司の中心地に近い位置の陸橋部を南北間の通路としたか、地形の高低を考慮して排水機能を高めたかの理由が推測される。

建物1は、西側に対応した柱穴が検出されないことから建物の西面部分とできるが、対応する柱穴が南北で検出される可能性もあり、東西棟か南北棟のいずれかに決定できない。しかし、建物1の西に約1mを離して雨落溝の可能性のある溝4があり、区画の中心にある主要な建物ではないとみられることから、切妻で、梁間が南面する南北棟と想定しておきたい。

溝3は北側南北方向部分から建物1の東辺まで約2.5m、溝4まで1.5mを測り、建物1や溝4との関連が想定できる。あえて推定すれば、溝3は、建物1・溝4などからの雨水を集めて溝2へ排水する溝とみることができよう。

検出した各土壌と各区画溝との重複は認められない。ただ、土壌1と溝1が端辺で重なるが、土壌1の本体は北にずれている。出土遺物からも時期的な差は認められず、ほぼ同一の時期に機能したものとみられる。

各区画と土壌の成立位置は、土壌1が北東区画の南西辺にあり、土壌2と土壌3が南西区画の北東辺に造られている。いずれも位置的には区画の中央部ではなく、縁辺部に営まれたとみてとれよう。

以下、土壌の検出状況と遺物の出土状況について、観察できたことを以下に記しておきたい。

複数の遺物廃棄土壌が、一官司内で検出された。

遺物の出土量が多く、一官司内での消費と廃棄に限定できない。

出土土器は平安時代前期のもので、土壌1・2が9世紀前半、土壌3が9世紀半ばから後半とみられる。

出土土器に完形品も認められるが、多数が破砕したものである。

土器の他に瓦片、焼土塊、炭片が混入している。

付表1 掲載遺物一覧表

番号	器種	器形	口径	器高	焼成	胎土	色調	調整	遺構	図
1	土師器	椀	16.2	3.9	良	長石	5YR6/6橙	ナデ、ケズリ	土壌1	13
2	黒色土器	椀	18.4	4.95	良	長石	7.5YR6/4にぶい橙	ミガキ、ナデ、ケズリ	土壌1	13
3	土師器	高杯		14.7	良	長石	2.5YR6/6橙	ナデ、ケズリ後ミガキ	土壌1	13
4	土師器	甕	18.6	6.3	良	石英、長石	7.5YR7/6橙	ナデ、ハケメ後ナデ	土壌1	13
5	須恵器	蓋	18.8	1.45	良		5Y7/1灰白	ナデ	土壌1	13
6	灰釉陶器	壺	19.7	2.7	良	長石	5Y3/2オリ-ブ黒	ナデ、タタキ後ナデ	土壌1	13
7	須恵器	甕	25.2	5.5	良	長石	10YR4/1褐灰	ナデ	溝1	14
8	土師器	椀	16.2	4.15	良	石英、長石	5YR6/6橙	ナデ、ケズリ	溝1	14
9	土師器	椀	18.6	4.2	良	長石	5YR6/6橙	ナデ、ケズリ	溝1	14
10	須恵器	蓋	22.0	2.1	良	長石	2.5Y7/1灰白	ナデ	溝1	14
11	須恵器	壺	底径3.4	3.1	良	石英、長石	5Y7/1灰白	ナデ	溝1	14
12	緑釉製品	不明		1.8	良		灰黄緑色	ナデ	溝1	14
13	土師器	皿	15.4	1.9	良	石英	10YR6/3にぶい横橙	ナデ、ケズリ	土壌2	16
14	土師器	杯	13.4	3.4	良	石英	10YR5/2灰黄褐	ナデ、ケズリ	土壌2	16
15	土師器	杯	13.7	3.2	良	砂粒	7.5YR6/6橙	ナデ、ケズリ	土壌2	16
16	土師器	杯	17.7	3.7	並	雲母	5YR7/4にぶい橙	ナデ、ケズリ	土壌2	16
17	土師器	甕	22.1	5.6	良	長石	10YR7/3にぶい黄橙	ナデ、タタキ、ハケメ	土壌2	16
18	土師器	甕	28.0	9.4	良	長石	5YR7/4にぶい橙	ナデ、タタキ後ナデ	土壌2	16
19	須恵器	杯	13.2	4.3	良	長石	10YR6/1灰	ナデ、ヘラ切後ナデ	土壌2	16
20	須恵器	杯	16.4	6.0	良	長石	N6/0灰	ナデ、ヘラ切り後ナデ	土壌2	16
21	須恵器	壺	底径4.6	15.2	良	石英、長石	5PB4/1暗青灰	ナデ	土壌2	16
22	土師器	皿	15.2	2.6	良	石英、金雲母	5YR6/6橙	ナデ、ケズリ	土壌3	17
23	土師器	皿	15.2	1.6	良	石英	10YR7/4にぶい黄橙	ナデ、ケズリ	土壌3	17
24	土師器	皿	16.8	3.0	並	砂粒	7.5YR6/6橙	ナデ、ケズリ	土壌3	17
25	土師器	皿	17.0	1.8	良	砂粒、雲母	5YR7/4にぶい橙	ナデ、ケズリ	土壌3	17
26	土師器	皿	18.7	2.75	良	石英、金雲母	7.5YR6/6橙	ナデ、ケズリ	土壌3	17
27	土師器	皿	19.5	2.35	良	長石	7.5YR7/3にぶい橙	ナデ、ケズリ	土壌3	17
28	土師器	皿	20.6	3.5	並	砂粒、雲母	7.5YR6/6橙	ナデ、ハケメ、ケズリ、ミガキ	土壌3	17
29	土師器	皿	8.4	1.2	並	砂粒	10YR7/4にぶい黄橙	ナデ	土壌3	17
30	土師器	皿	13.9	2.4	並	砂粒	5YR6/6橙	ナデ、ケズリ	土壌3	17
31	土師器	皿	14.0	2.5	並	砂粒	5YR6/6橙	ナデ、ケズリ	土壌3	17
32	土師器	皿	15.4	1.9	良	石英、長石、金雲母	5YR7/6橙	ナデ、ケズリ	土壌3	17
33	土師器	皿	15.8	2.55	良	石英	5YR7/6橙	ナデ、ケズリ	土壌3	17
34	土師器	皿	15.8	2.2	良	長石	5YR6/6橙	ナデ、ケズリ	土壌3	17
35	土師器	皿	15.9	2.1	並	砂粒	7.5YR6/6橙	ナデ、ケズリ後ミガキ	土壌3	17
36	土師器	皿	15.9	2.5	並	砂粒	5YR6/8橙	ナデ、ケズリ	土壌3	17
37	土師器	皿	16.2	2.3	良	長石	5YR6/6橙	ナデ、ケズリ	土壌3	17
38	土師器	皿	16.8	2.5	並	砂粒	7.5YR7/6橙	ナデ、ケズリ	土壌3	17
39	土師器	皿	16.8	1.7	良	石英、金雲母	7.5YR7/4にぶい橙	ナデ、ケズリ	土壌3	17
40	土師器	皿	17.8	2.9	並	砂粒	7.5YR6/4にぶい橙	ナデ、ケズリ	土壌3	17
41	土師器	椀	11.6	3.5	良		5YR5/8明赤褐	ナデ、ケズリ後ミガキ	土壌3	17
42	土師器	椀	12.6	3.75	良	長石	7.5YR7/4にぶい橙	ナデ、ケズリ	土壌3	17
43	土師器	椀	12.8	3.2	良	石英、長石	7.5YR7/6橙	ナデ、ケズリ	土壌3	17
44	土師器	椀	12.8	2.45	良	石英、長石	7.5YR7/6橙	ナデ、ケズリ	土壌3	17
45	土師器	椀	13.0	3.5	良	石英、金雲母	7.5YR5/3にぶい褐	ナデ、ケズリ	土壌3	17
46	土師器	椀	13.0	3.2	良	石英	10YR7/3にぶい黄橙	ナデ、ケズリ	土壌3	17
47	土師器	椀	13.4	3.4	良	石英、金雲母	5YR6/6橙	ナデ、ケズリ	土壌3	17
48	土師器	椀	13.4	3.0	良	石英、長石	10YR6/3にぶい横橙	ナデ、ケズリ	土壌3	17
49	土師器	椀	13.4	3.3	良	石英、長石	2.5YR7/4にぶい橙	ナデ、ケズリ後ナデ	土壌3	17
50	土師器	椀	14.0	2.9	良	石英、長石	2.5YR7/4にぶい橙	ナデ、ケズリ後ナデ	土壌3	17
51	土師器	椀	16.2	3.45	良	石英、長石、金雲母	10YR7/3にぶい黄橙	ナデ、ケズリ	土壌3	17
52	土師器	椀	16.3	4.0	良	長石	5YR7/6橙	ナデ、ケズリ	土壌3	17

番号	器種	器形	口径	器高	焼成	胎土	色調	調整	遺構	図
53	土師器	椀	17.8	3.7	並	砂粒	5YR6/6橙	ナデ、ケズリ後ナデ	土壇3	17
54	土師器	椀	18.6	5.35	良	石英、長石	7.5YR7/6橙	ナデ、ナデ後ミガキ	土壇3	17
55	土師器	椀	19.6	3.7	良	石英	7.5YR6/6橙	ナデ、ケズリ後ミガキ	土壇3	17
56	土師器	杯	17.5	3.3	良	石英、長石	5YR7/6橙	ナデ、ケズリ後ナデ	土壇3	17
57	土師器	杯	18.6	3.3	良	石英、長石	5YR7/6橙	ナデ、ケズリ後ミガキ	土壇3	17
58	土師器	杯	18.6	4.4	並	砂粒	7.5YR7/6橙	ナデ、ケズリ後ミガキ	土壇3	17
59	土師器	杯	17.4	4.85	良	長石	7.5YR6/4にぶい橙	ナデ、ケズリ、ミガキ	土壇3	17
60	土師器	杯	18.9	4.8	やや軟	石英、金雲母	7.5YR7/6橙	ナデ、ケズリ後ミガキ	土壇3	17
61	土師器	蓋	17.6	1.72	良	石英	5YR6/6橙	ナデ、ミガキ	土壇3	17
62	土師器	甕	8.6	3.2	やや軟	石英、長石	5YR5/4にぶい褐	ナデ	土壇3	18
63	土師器	甕	14.6	6.6	良	石英	7.5YR7/4にぶい橙	ハケメ、タタキ後ナデ	土壇3	18
64	土師器	甕	16.4	5.0	良	石英	10YR5/2灰黄褐	ナデ、タタキ後ナデ	土壇3	18
65	土師器	甕	17.6	5.75	良	石英	7.5YR6/4にぶい橙	ナデ、タタキ、ハケメ後ナデ	土壇3	18
66	土師器	甕	21.6	7.7	良	石英、金雲母	10YR7/4にぶい黄橙	ナデ、タタキ、ケズリ、ハケメ	土壇3	18
67	土師器	甕	22.8	11.2	並	砂粒、雲母	10YR6/4にぶい黄橙	ナデ、ハケメ	土壇3	18
68	土師器	甕	26.8	6.1	良	石英、長石、金雲母	7.5YR8/6浅黄橙	ナデ、タタキ後ナデ	土壇3	18
69	土師器	甕	28.0	14.0	並	砂粒	10YR7/4にぶい黄橙	ナデ、タタキ、ハケメ	土壇3	18
70	須恵器	蓋	8.2	1.3	良	石英、長石	2.5Y5/1黄灰	ナデ	土壇3	19
71	須恵器	蓋	13.8	2.3	良	長石	N6/0灰	ナデ	土壇3	19
72	須恵器	蓋	13.9	1.5	良	砂粒	5PB4/1暗青灰	ナデ	土壇3	19
73	須恵器	蓋	14.0	1.0	良	長石	N5灰	ナデ	土壇3	19
74	須恵器	蓋	15.0	2.0	並	砂粒	5PB4/1暗青灰	ナデ、ケズリ後ナデ	土壇3	19
75	須恵器	蓋	16.0	1.2	良	長石	2.5GY6/1オリーブ灰	ナデ	土壇3	19
76	須恵器	蓋	17.0	1.05	良	長石	N6/0灰	ナデ	土壇3	19
77	須恵器	蓋	17.0	1.15	良	石英、長石	2.5Y6/1黄灰	ナデ	土壇3	19
78	須恵器	蓋	18.0	2.1	良	砂粒	2.5Y7/2灰黄	ナデ	土壇3	19
79	須恵器	蓋	20.0	1.2	良	長石	N6/0灰	ナデ	土壇3	19
80	須恵器	皿	14.4	2.1	良	石英	10YR7/2にぶい黄橙	ナデ	土壇3	19
81	須恵器	皿	18.0	1.9	良	長石	2.5Y6/2灰黄	ナデ	土壇3	19
82	須恵器	皿	19.4	1.55	並	砂粒	5Y6/1灰	ナデ、ケズリ	土壇3	19
83	須恵器	壺	底径13.8	24.4	良	長石	N6/0灰	ナデ、タタキ	土壇3	19
84	須恵器	杯	13.3	3.8	良	石英、長石	5Y6/1灰	ナデ	土壇3	19
85	須恵器	杯	12.8	3.6	やや軟	石英	5Y8/1灰	ナデ	土壇3	19
86	須恵器	杯	13.0	3.2	並	砂粒	10YR7/2にぶい黄橙	ナデ	土壇3	19
87	須恵器	杯	13.6	3.0	不良	砂粒	10YR7/1褐灰	ナデ	土壇3	19
88	須恵器	杯	13.6	4.1	良	砂粒	2.5Y6/1黄灰	ナデ	土壇3	19
89	須恵器	杯	13.4	4.15	良	砂粒	5B5/1青灰	ナデ、ケズリ	土壇3	19
90	須恵器	杯	13.4	4.45	並	砂粒	N5灰	ナデ、ケズリ	土壇3	19
91	須恵器	杯	15.0	2.7	並	砂粒	2.5Y7/1灰白	ナデ	土壇3	19
92	須恵器	鉢	底径11.6	2.6	並	砂粒	5B5/1青灰	ナデ、ケズリ	土壇3	19
93	須恵器	甕	18.0	6.7	良	石英、長石	N5灰	タタキ、ナデ	土壇3	21
94	須恵器	甕	19.4	5.2	良	石英、長石、金雲母	2.5Y6/3にぶい橙	タタキ、ナデ	土壇3	21
95	須恵器	甕	21.6	4.0	良	長石	5B6/1青灰	ナデ	土壇3	21
96	須恵器	甕	22.8	7.2	良	長石	5Y6/1灰	ナデ、ケズリ	土壇3	21
97	須恵器	甕	48.0	6.0	良	砂粒	N5/0灰	ナデ、タタキ、スリケシ	土壇3	21
98	灰釉陶器	椀	13.6	4.7	良	長石	2.5Y7/1灰白	ナデ	土壇3	22
99	緑釉陶器	椀	17.0	3.8	良	砂粒	10Y7/1灰白	ナデ、ケズリ	土壇3	22
100	緑釉陶器	椀	16.6	6.9	良	長石	2.5Y8/2灰白	ナデ	土壇3	22
101	緑釉陶器	椀	底径4.2	2.0	やや軟		2.5Y8/2灰白		土壇3	22
102	灰釉陶器	椀	底径8.9	1.5	良	砂粒	10YR7/2にぶい黄橙	ナデ	土壇3	22
103	土師器	皿	10.8	1.0	並	砂粒	10YR8/4浅黄橙	ナデ	柱穴1	23
104	灰釉陶器	壺	8.8	4.0	良	長石	7.5Y6/1灰	ナデ	柱穴1	23

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきゅうおおきみのつかさあと							
書名	平安宮正親司跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2006-12							
編著者名	平田 泰							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2006年10月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきゅう 平安宮 おおきみのつかさあと 正親司跡	きょうとしかみぎょうく 京都市上京区 しもちょうじゃまちどうり 下長者町通 しちほんまつにしいる 七本松西入 ほうずいちよう 鳳瑞町223	26100		35度 01分 27秒	135度 44分 13秒	2006年8月 9日～2006 年9月15日	280㎡	新学寮 建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
平安宮 正親司跡	都城跡	平安時代前期	土壌、溝、柵、建物、柱穴	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、瓦	平安宮正親司内の区画溝、土壌、建物を検出した。			
		平安時代中期	柱穴	土師器、須恵器				
		江戸時代	土壌、柱跡	陶器、施釉陶器、染付磁器				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-12

平安宮正親司跡

発行日 2006年10月31日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
発行 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1
住所 〒 602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地
〒 604-0093 TEL 075-256-0961